

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一一七号）

目

智愚の毒を滅す……………近角常観…（1）

近角常観先生の念仏の豪気……………柳瀬留治…（12）

次

真理の一言……………花田正夫…（15）

正信偈私解（八）……………白井成允…（18）

慈

光

才十卷

第十二号

智愚の毒を滅す

近 角 常 観

一 機 縁 純 熟

今年は信仰上有り難き年と思ふことであります。新年以来引き続き信仰につき話して居るのでありますが、殊に此頃は、諸方面とも、非常に因縁が熟して来たと思ふ事であります。

然し諸方面に信仰が熟して来たといふは、強ちに多くの人が挙つて、信仰を聞かれるといふことでもなく、又世間の思想界に信仰の機運が目に見えて、著しく起つて来たといふのでも無い。

唯私の深く感ずるは、從來この信仰の事に縁のあつた総ての人々が、不思議にも段々自身自身に直接に佛のお慈悲を頂いて喜ばるるやうになり、又既に喜んで居る人は、更に深く氣附きて、一層喜びを高め、又お慈悲に遠のきて居られた人々は、種々の御縁により、廻り／＼て再びお慈悲に立ち戻るといふやうになり、十年二十年來養はれてあつ

た御縁が熟して、お慈悲をお喜び下さる人が、毎日々々出てくるといふ風に私の心に感ずるのである。

こは畢竟大悲の親のみ心が総ての人の心中に到り届いて下さる時機^{つまり}到つたもの、又從來お喜び下さる方には、なほ一層大悲をお頂き下さる時機到つたものと、深く感ずることであります。

であるから今日の題は「智愚の毒を滅す」と出しました。即ち智慧と愚鈍の毒を滅して下さるといふのである。今日は此の題により、今言ふ從來喜んで居らるる方が、自分の缺点を自覚し、又は自分の氣つかざる処を知らせて貰つて喜ばるる、其の有様を申し述べ、進んでかく諸方面に因縁の熟する有様につき、申し述べようと思ひます。

二 わかるわからぬで助かるので無い

「智愚の毒を滅す」とは、こは恰も昨年の第二回夏季求道会の時、最後の講話に申したる「信巻」三信釈の最後の

御言葉であります。即ち恰も昨夏季求道会の最後の止め言葉となつた御文であります。

先づ之に就いては、後に丁寧^べに本文につき申し述べる事として、先づ今日は、私がこの言葉につき聞いて頂きたいと思ふ肝腎の事柄は、我々が広大の佛のお慈悲に対するに当り、我々がこの様に浅間しく、分らぬことでは仕やうが無いと思つて、自分の分らぬ事や、自分の罪深く、自分の煩惱の止まぬ事を悲しみ歎くといふ、此の自分の愚かなることを歎く、といふことがある。

けれども、佛のお慈悲は、その私の悪しく浅間しい罪深き処、私の最も心配になつて仕やうが無い処、周囲の誰れもが最も了解して呉れぬところ、総て斯くの如く、私の最も暗黒なる処をば佛の方で先きに知^しり下されて、其処をばお見捨てなきが広大のお慈悲故、こゝをば頂く一念に、如何なる愚かなる者も、其広大なる御哀れみに満足して、その遣る瀬なきお心一つに安心して、手丈夫に喜ばせて頂く事が出来るのである。

又自分の心に於いて「其のことは能く分つてゐる。その事は能く承知して居る。佛は必ずこの者を助けて下さるに間違ひないのである。あゝである、斯うである」と自分では能く分つた積りで居るのであつても、若じやその分つたが自分の智慧を雑^{まじ}へて、自分の心で「然う思うてゐる」の

であつたり、自分の合点了解であるならば、そは自分の心で然う思ひ、然う決め込んで居るまでである。然う思うて居る心は、矢張り佛を疑ひ隔てて居る此方のわたくし、心に外ならぬのである。

故に斯く此方より分つたなどと思ふその心を、遣る瀬なく哀れみ思召し、お見捨て無き広大の慈悲に遇ひ奉り、ここでその心の夜を明けさせて貰はねばならぬ事である。

又「此方は分らないでもよいのである」などと思つて居るのも、矢張り凡夫の智慧でさう思うて居る迄である。佛のお慈悲は、設^{たと}ひ分つても、分つた処が有難いのは無い。又分らぬと言ふのも、凡夫の智慧で然う思うて居るまでである。佛より御覧下さる時は、我々の分る分らぬで助かるのではない。我々の分る分らぬや、我々の善し悪しは、畢竟お慈悲の上より言ふ時は、凡夫の浅暮な智慧で、さうこしらへて、然う思うて居るまでのことである。

で、その哀れなる様をば佛の方より能く知ろし召し下され、その私の善いと思ふが善いでなく、その悪いと思ふが悪いで無く、そのして見様のなき有様をよく御承知の上で、御見捨て無き広大の御真実を聞く一念に、私の智慧も愚鈍さも、その遣る瀬無きお慈悲に滅され、佛智不思議の有難やと喜ばせて貰へるが、佛の広大のお慈悲であるこのことを丁寧に話したいと思ふのであります。

しかる処、今も申す如く、私の近頃殊に有難く思ふ事は、今年は先づ第一に、近きは私の一家を始め、又当学舎の人々の間に於いても、又平日から常に講話を御来聴下さる重立ちたる方々を始めと致しまして、信仰上常に聴いて居らるる処に更に一段の驚きを立てて、或は又自分自身の心状に省みて、色々とお喜び下さる方の多いのである。故に今申す信心の極く「かなめ」の味ひを、これらの実際上の味ひより、喜ばせて頂き度いと思ふ事であります。

三 信仰上二種の傾向

昨年末の講話に於いて、『佛智不思議』の題でお話したのであります。昨年最後のその講話が多くの人に大層不審を起させ、之がもとになりて信仰が起つたやうにあるのであります。

勿論、それも其の人／＼の御縁に従つて色々の原因があり、一概に言へぬのでありますけれども、昨年の暮に於いては是の事を申したのであります。

兎角信仰を喜ぶにつき二種の傾向がある。で、著しくお慈悲に気がついた人、即ち今まで苦しみ悩みて法を求めて居た者が、著るしく佛のお慈悲の深きことに気がつき、自分の浅間しき根性の底の底まで知り抜きて、而も其者を見捨て給はぬ広大なお心を頂きたる人は、一旦は心の悩み全く取れ、胸中一点の滞りなく非常にうららかに喜ばせて貰

へるのであるが、其の人は佛のお慈悲に打ちあかされた其の喜びの余り、いつの間にか、其の自分の喜びに目が着き、知らず識らず、自分は佛の恵みを頂いて了うたと、極端に言ふならば、悟つたやうな心持ちになり、

「もう一切の煩悶も、罪惡も、滅んで仕舞うたから」

と、恰も此の世ながら佛になつたやうな氣で喜ぶもの故、いつの間にか、つひ／＼「らく」になつた、其の自分の氣持を頼みにする間違ひに陥入り、強ち自分の罪のして見やう無きを、見捨て給はざる広大の御恩を忘るゝのでなければ、それとは無しに、それが昔の事になつて仕舞ひ、自分の「らく」になつた心持ばかりを喜ぶやうになるのである。青年諸君の中に之が多いのである。能く自分は念佛稱へるでも無しに「己はもう分つた、頂けた」といふやうなことになるのであります。

すると又一面には、佛のお慈悲を幼よりの、べつに聞き、本願の事は常に耳なれて居る宗教の家庭に生れた人であるとか、或は平日、聴聞し慣れて居る同行信者の人達、さなくとも青年の方でも聞きなれて居る人達などには、いつ喜んだといふ事もなく、「斯く悩みの止まぬ者を、お見捨てなきが広大のお慈悲である」と云うて、一向ここぞと取り押へてお見捨て無き真実の頂けて居ぬ人がある。よく同行信者の人などは「御信心頂いても、今も昔とちつとも変る

ことは無い、同じである」と、お慈悲で心の夜が明け、疑ひが取れるといふ処は更に無くして「斯くの如く浅間しき、悪しき心の其の儘で、此の者をお助け」と、この処で「けじめ」が立たず、のべつになつて居る人が多いのである。するとこれでは、お慈悲でがつくり自分の心の頭が下り、今まで人を不足に思つて居つたは、全く自分が悪かつた、と此方の頭の折れるといふところは更に無い。何時の間にか「悪うてもお助けである、浅間しくてもよいのである」と、自分でさう言つて居る積りでは無けれども、知らず識らずの間に、おのづからこゝになつて仕舞ふのである。斯くなると、仏智不思議が、更に不思議で無くなつて仕舞ふのであります。

四 不思議の真意の頂けて無い人

一例を申せば、旧臘もある方がお訪ね下されて、「私は仏智不思議を信ぜさせて頂きました」と仰言るから、私は「それではどうお頂きなされたか」とお尋ねした。

すると「助からぬ者をお助け下さるが不思議である」と言はるる。「それでは其の味ひはどうでありますか」とお尋ねすると、さあ其処になるともう分らぬのである。「助けて下さるといふは、極楽に行くことか」などと言ふやうな事になり、この浅間しき者を真にお見捨て下さらぬその味ひは、更に頂けて居ないのであります。

で、この種の人の喜ばるるは「浅間しき者を仏はお助け」は今の悟りにおちる人とは異りて、遣る瀬なきお慈悲に打ちあかさるるといふ処は更に無くして、その上に我と我が手を挙げ、称名相統するやうになるのでありますけれども、今の我が心に、真に遣る瀬なきお恵みを頂いて、お慈悲に夜が明けたといふ処は少しも無い。常に言ふ如く、仏のお慈悲と我々の悪しきとが、出違ひになりて居るのである。「我々は悪いけれども、仏はこの者をお見捨て無いのである」と。ここの処で我が身の悪しきが手放しになりて、喜ばせて貰ふといふ処が更に出て居ないのである。これでは真にお慈悲が頂けたにはならぬのであります。

さうでは無く、此方は真に悪しき其の者が、広大のお慈悲で、その惡の大もとが滅され、頭が下るといふ処が無くてはならぬのである。で、この類の喜び方をして居らるる人の不思議は、不思議が唯言葉だけになりて居る。「助からぬ者をお助け下さるのが不思議である」とか、或は「仏智不思議を信ずる」とか言うて居ながら、その不思議の真の味ひが、更に分つて居無ないのであります。

さて斯くまで言ふと、之等の人々も不審が立つのでありますけれども、一般には不思議不思議と言ひ流して、その不思議の肝腎な処は何処であるとまでは言はぬのである。昨年末の講話に於いても申したのでありますが、真実の肝

賢は、この不思議の分ると分らざるとにある。弥々真宗の御正意が頂けると、頂けぬは、此の不思議が分ると、分らざるとで決まるのであります。処が今の聞き慣れて居られる人々は、他力に於いては不思議が当り前と思うて居られるもの故、不思議々々と聞いても更に驚きを立てぬ。夫等の人々の思うて居らるる不思議は、不思議々々と押へつけた、不思議の丸飲みである。こゝが先達て来、皆様の驚きを立てられた処なのであります。

五 不思議の味ひ

そこで順序を踏まなければならぬ故、茲で不思議の味ひを申します。不思議とは何か、不思議とは思ひがけないことが不思議である。我々が向うに行くと彼の人に遇はれるからと、行きて遇うたのなら、不思議でも何でも無い。処が我々が到底遇はれまいと思うて行つた処が、計らずも尋ねて居る人が向うから来た時は、これは実に思ひがけ無いのである。これは実に不思議ぢやと、この思ひがけ無い事に会つた場合に出る言葉であります。

処で今の真宗の教へを聞きなれて居る者は、この不思議の意味を甚だ悪しく、俗に奇妙といふ程の意味に取り助からぬ者を助けて下さるは不思議ぢや、奇妙ぢやと、いふやうに言うて居るから、いつまでも不思議の真意が分らぬのである。

からしてが、甚だあてにならぬのである。

処で仏のお慈悲とはどうかといふに、茲で意外千万な事が起つて来るのである。夫れを今更の如く私は茲でお話する。それは今更の如く皆様にも聞いて頂きたいからである。実に思へば思ふほど意外な事が、こゝに起つて来るのであります。

六 意外なる西岸上の喚び声

さてそれは何か。初めよりお話するならば、斯く我々は善き心は起らず、悪しき思ひは止まず、実に自分如き仕やうの無い者は無いと、自分の方より人に遠慮し、隔てゝかかれば、人も此方を隔て、疎んずるに至る、実に仕て見やうなきが我々の有様である。

こゝにおいてか、人の事は兎に角に、自分さへ隔て根性がどうしても止まぬ。自分程悪い者が無いと言うては人を隔て、向ふが悪いと言うては相手を隔て、甲にも、乙にも隔て根性がどうしても止まぬのである。してそれで自分ながら善いと思うて居るかといふに、その癪悪いと思うて居るのである。

自覚の上から然う思うて居るのでは無けれども、其のため涙を流し、泣いて悲しんで居るのである。斯くこれ程までに止めたい／＼と思へども、どうしても悪しき根性が止められぬ世の中に、計らんや一人の人あつて、この者に言

我々がこのお慈悲の上で、不思議といふは、実に思ひがけもなく、此の度大悲の親に遇うたのであるから、実に不思議なのであります。

然らばそんなに驚かんならん程までにそれが不思議であるは何うかと言ふに、ここはお慈悲の上の言葉で言ふと、我々は御本願慣れ、御教化慣れがして居る故に、然ういふ慣れのせぬやうに、世間の止で分り易く申します。

我々は日常の日暮しに於て、「我々は悪しきことをしてはならぬ、善きことをせねばならぬ。善いことをすれば、人は賞める。悪しき事をすれば、人は憎む。たとひ人がどれ丈賞めようと、悪い事をすれば自分で気持ちが悪しいし、又人がどれだけ悪しく言はうと、善いことは何処までも善いのである」といふ考へで日常の日暮しをして居るのである。

処が實際その通り、その善いが出来、悪いが避けらるるならば、事は無いのでありますけれども、実際に於いては我々は我々が自分で決めた、その善し悪しさへ思ふやうに実行が出来ぬ。況んやその善し悪しが、自分の都合で、自分によきをば善しとし、悪しきをば悪しと決めた善し悪しであつて、善いといふのも、かくすれば自分の為に善いといふ処より、善しと仕て居るのであれば、悪いといふのも真に心から懺悔しての悪しといふのでは無くして、悪くては自分が困る処から、悪しとして居るのである。第一これ

はるるには

「イヤ／＼然うでは無い。我は君の隠してゐる心中を、皆知つて居る。君の言ふ悪いは、成る程悪い。我は決して善いとは言はぬ。併しながら、我は君の如く、君が悪いというても君を斥ける事はせぬぞ。君が悪しきために君を捨てる事はせぬ。君は君自らまでが自分が悪いと言つて、自分の心を隔てて居るのであるが、それはまた我が友情を知らぬからであるぞ。我とて君が有様を見て、決して善いといふのではない。如何にも悪しき浅間しき君であるが、その浅間しき君を飽くまで捨てぬのが、我が君のため、友たる処であるぞ。否飽くまで捨てぬ計りでなく、どうか早くこの我が心を屈けて、君の苦しみを抜いてやりたいと、態々こゝまで出掛けて来た我である。我は夫れ程までに君を思ふの故、この我が心が君も知られたら、いらざる苦勞は早くやめて、どうか我が心を能く味うて呉れ」と。此方は人を疑ひ、隔て、自分の悪しきために、身も引き裂かる計りの苦痛を仕て居るのに、計らんや、その者に向はせられて

西岸上に人有りて喚つて言はく。

『汝一心正念にして直に來れ。我能く汝を護らん
すべて水火の難に墮せんことを恐れざれ』
との広大の呼び声なのであります。

七 やるせなき大悲のお心

而してこゝで言はなければならぬは、常に言ふ如く、「能く」の一字である。能くとは其の私の悪しき心の有り丈をよく御承知の上で、其の悪しきが止まぬが哀れと、其の広大の同情のお力で、遂に私の心配の根本を融かしおほせるまで、飽くまで、哀れんで下さるが「能く」である。で「我能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを恐れざれ」と、「汝は食欲の波逆立ち、瞋恚の炎燃え、そのため夙夜苦しんで居るのであるが、それを恐れるな、気づかひするな」とは何故であるか。「設ひ如何なる猛火来るとも滅ぶること無き汝の其の食欲瞋恚の心に向つて、我はそれを可哀想に思ひ、此方よりは食欲瞋恚を離れた広大の心を以て、常に其の者に向つて居るのであるぞ」と、こゝが実に肝腎なのであります。

私は常に人に向つて食欲瞋恚の心を起して居る。それを私は横合ひから救ひ取つて下さる、といふのではない。私の食欲瞋恚のひどいため、慈悲ある人も既に皆手を納めて仕舞はれた我々である。其の一旦出された手を引つ込めさせて仕舞ふ。夫れ程までに我々は悪いのである。然るに私は是れ程までに悪い我々の食欲瞋恚を皆知り抜いて、其の奴が実に哀れだと、自分の一身を投げ出して、其の者に向うて下さる広大のお慈悲なれば、このお心の頂かれた一念

で居た世の中に、其の根性の悪いのが可哀想である。此の隔ての多いのが哀れであると、夫れ程迄のお心とは、実にく恐れ入りました」と、其の如何にもお慈悲の深きため、如何な私の疑ひ隔ての根性も、最早きかなくなり、実に何とも申訳無いとなるのである。

で、このお慈悲頂いた上より言ふ時は、この仕て見やう無き私のために、斯程までに遣る瀬なく思し召し下さるお慈悲が実に不思議である。蓮如上人が、この悪凡夫が佛になるが不思議と仰せられた其の不思議は、これ程までに悪い者を、夫れ程までに言うて下さる御心は如何にも御不思議である。との仰せなのであります。

で、著しく言ふ時は、何も本願といふ大きな事ばかり頂くので無い。我々がこの行き詰つてゐる心中に、たとひ針の先で突いた程でも、この仕て見やう無いと泣いて居る者を、それを捨てぬお慈悲とは不思議ぢやと頂くと、するとその一点気づかせて貰つたお心は、実に私の八万四千の煩惱を残らず知ろし召し、それが一々哀れだと、遣る瀬なき大悲の思し召しより、飽くまで其の者を照して、見捨て給はぬ広大の御心である。こゝになると、最早や言葉の言うて見やうが無い。此れ程までに浅間しき私を、それ程の広大の哀れみとは実に能くくも、あやまりはてて、お慈悲を喜ぶ外なくなるのである。

には、こゝでこゝろりと此方の食欲瞋恚を仏のお慈悲に取られて仕舞ふ処があるのである。この取られた味ひが一念には無くてはならぬのであります。してその取らるる味ひは、心中に成る程有難いと頂いた一念、自分で取らうと思ひて取れるので無く「不断煩惱得涅槃」と頂くと、最早それらの罪咎が何等の心配にもならなくなつて仕舞ふのである。

故に蓮如上人の『御文』のお示しには言はく、

『されば無始以来つくりとつくる悪業煩惱を、のこころとこゝろもなく、願力不思議を以て消滅するいはれあるが故に、正定樂不退のくらゐに住すと云々。』

又親鸞聖人は「転悪成善」とお示し下されてある。又『唯信鈔文意』には其の転の意味をお知らせ下されて

『転ずといふは、つみをけしうしなはずして、善になすなり。よろづのみづ大海にいりぬれば、すなはちうしほとなるがごとし。』

とのお言葉もあるのであります。即ち今日迄心に人を憎み隔てゐる我々が、其の飽くまで私を憎まず、隔てぬ広大のお心に遇ふ時は、今迄隔て憎みて居たは実に悪しかつた、申訳なかつたと、その隔て給はぬ遣る瀬無き御親切のために、此方の頭が下り「あゝよくく此の浅間しく、此の仕て見やう無き根性では、最早や一寸も動けぬと思う

八 道徳と信仰と矛盾する間は

で私など頂いたのは十七年前の事でありますが、それまでの長い間の私の道徳観念は、善き事はよい、悪しきことは悪い、故に我々は出来る丈善く仕なければならぬ、といふのであつた。而もさう言ひつつお慈悲の方は「悪くともよいのである」と、丸で矛盾した事を言うて居つたのである。「日々の日暮しの方は、悪しくはいかぬ、出来る丈善く仕なければならぬ」と言ひつつ、佛のお慈悲の方は「悪くともよい」といふの故、之では佛のお慈悲の方より云へば道徳は碎けて仕舞ひ、道徳を立てればお慈悲の方は碎けて仕舞ふ。

この矛盾を心中に置きつつ、而もそつと胸撫で下し「併し出来る丈は善くしなければならぬ」と、実に可笑しな状態で、而もこれで頂けた積りで長らく居つたのであります。併しこれではどれ丈け悪しくしてもよいのであると押えて見ても本當に満足されず、それかと言つて、その「よくしなければならぬ」は、我々の悪の根性が強いもの故、そのために負けて仕舞うて、いつ迄たつても本當にならぬ。で、『歎異抄』の御言葉には、

『くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ悪人をたすけんと言ふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまはんず

れとおもふほどに、願力を疑ひ、他力をたのみまゐらす
るところかけて、云々」

と、みんなが、信仰上最も苦心する処、……又「成る程
悪人を助けて下さるお慈悲には違はぬも、もつと喜べるや
うでなくでは」など言ひて、出られぬ処はここなのであり
ます。

九 我等の隔て根性

処が私が御慈悲に氣づかせて貰うた一念は、今迄出来る
だけ善くしなければならぬなど思つて居つたは、以ての外
の間違ひであつた。自分はこの通り、長い間人を隔て疑
ひ、善い事どころか、実に申訳なき者であつたのである。
で、この者を人が見たら、如何にも許し愛する者の無い筈
である。この悪い奴故、人が悪いと見るのが、むしろ当り
前なのである。

然るに今「此の悪い者を、其の悪いのが哀れと見捨てて
下さらぬお慈悲とは」と、……茲で佛は悪い者を善いと
言つて下さるので無い。悪い私の根性の有り切りを向ふは
皆知り抜いて下されて、其の上で、その悪い私を「悪くて
も悪いと思はぬ、悪くてもよい」というて下さるのでは、
此方の悪い根性が天下晴れて通れる故、それでは此方の心
の折れるといふ処がない。

しからば善く出来るかといふに、善く出来ぬ。——で常

に言ふのでありますが、自分の家内で疑ふ者は、他家へ行
つても疑ふ者である。家内で争ふ者は、世間に出て争ふ
者である。我々は、人と疑ひ隔たるもとは、相手にあると
思つて居るのであるけれども、相手が悪しくするから此方
が隔たるので無い。人に触れれば人を斬り、馬に触れば
馬を斬る、といふ具合に、家内に在りては家内で悪しき性
分が出で、道を歩いては道行く人に疑ひの根性を起し、電
車に乗れば、電車に乗り合つた人に対して、邪推の根性を
以つて向うてかゝる我々なのである。で隔てる「もと」は
自分の心に在る。処が誰でもお慈悲に向ふ時は、「自分は
人には隔て悪しくして居るけれども、佛にはして居ぬ」と
思つて居り、而して佛は、その人間同志互に相隔てて居る
者を、救うて下さるのであると思つて居るのであるけれど
も、弥々真に自分は佛に隔てて居ぬか何うか。

「人に隔てて居るけれども、佛には隔てて居ぬ」と思
つて居るは、自分の方で然う決めこんで然う思つて居るまで
の事にて、小供が「自分は道楽して居るけれども、親丈は
此の者を捨てて下さらぬ」と、親がそのために日夜、夜の
目も合はさず心配して下さるその御心の方は頂かずし
て、自分の独りぎめで然う思つて居ると同じである。即ち
然う言つて居る心、実に遣る瀬なき親の心配を受けつけ
ず、隔てて居る心である。でその如き喜びは、何か煩悶事

が起つて来ると、忽ち有難く無くなり、一辺に喜びが失せ
て仕舞ふ。而もその失する底の喜びで、周囲を隔てながら
念佛称へ、佛はこの者を向ふより救うて下さるお慈悲であ
ると、言うて居るのであります。

十 「げにほこられ候へ」

処がここに何人か知らぬが一人の人があつて、この者に
言はるるには

「君の心や、君の性分は皆知つて居る、君の現在思つて
居る位のこと、聞かぬかて皆知つて居る。君の隔てるの
は、君は人ばかりに隔てて居ると思つて居るのであるけれ
ども、人ばかりで無い、我に向ひても隔ててゐるのであ
る。で我が是れだけ言つても、中々一応二応で君は信ぜら
れまい。併し君が一応二応隔てても、其のために我が君に
対する心はびくとも動かぬぞ。君は総てに就いて萬事先廻
りする性分故、君が我に対してどう思つて居るか位は、我
は疾くから分つてゐるのである」と、と此方が知らぬと思つて
る事まで、向ふは恐る可き程先まで知り抜いて、此方の最
も苦にして居る処を、先手を以て押へらると、こちらは
びつくりして縮み上つて仕舞ふ。処へ向ふの遣る瀬なき仰
せを頂いて「斯くの如く、此方は隔て、申訳なきこの者
を、隔て給はぬ大悲の有難や」と、涙を流して頂くとよい
のであるけれども、動もすればこゝで、「如何にも有難い

お心であるけれども、余りに悪い奴故恐れ多い」と氣兼ね
心を出し、余りにお慈悲の思ひがけないために、此方が遠
慮して引き下つて仕舞ふ。

私が煩悶した時に、親が「自分は年をとつた身である。
汝の苦しみに代はれるものなら代つてやりたい」と言つて
下されたは、如何にも有難いけれども、「夫れ程までに、
親に心配かけて、実に済まぬ」と此方が引き下つて仕舞ふ
故、折角の有難き親のお心が頂けぬ。向ふの言つて下さる
お言葉を充分に聞かぬ中に、此方が引き下つて仕舞ふか
ら、折角の親の御苦労が水の泡になつて仕舞ふのである。
で、茲になると向ふの御苦労も一応二応ではない。向ふ
はこの者にどう言つて下さるかといふに

「汝に与へるためにこさへた財産故、汝が遠慮すると、
折角苦心した所詮が無くなつて仕舞ふ。汝は唯口先丈有難
い」と言つて居るのであるが、それでは唯挨拶だけであ
る。此方のやらうといふ肝腎の金を受取つて満足して呉れ
るので無くては、如何程礼言つて呉れても仕やうが無いで
はないか」

と。……で『歎異抄』の御教化には、
「本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をた
のむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ」
実にひどい御言葉である。又、

「持戒持律にてのみ本願を信すべくば、われらいかに生死をはなるべきや。かゝる浅間しき身も本願にあひたてまつりてこそ、げにはこれさふらへ」

実に「斯る仕て見やうなき食乏人も、かゝる慈悲ある人に遇ひ奉りたればこそほこれ候へ」である。私などは長い間、この「ほこる」の味ひが分らなんだ。「ほこる」は「悪くてもよい」と思ふことも知れぬなど思うて居た。処が「ほこる」は向ふのお慈悲の深きに打ち明かされ、此方の心配がらくになることであつたのである。こゝになると、実に大悲の光明に打ちほだされ、大船に乗つて、広海に浮んだ心持である。故に『行巻』には

『大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふなり』

遣る瀬無き広大のお慈悲に打ち明かされ、「実に私が悪う御座りました」と。こゝはお慈悲に甘えるのではなく、お慈悲の深きため、いつの間にか、自分の心配が消え、遣る瀬なき大悲全身に充ち、暗き心の夜が明けるのである。すると斯くまでお慈悲の深きも不思議、又そのお慈悲で心の暗みのとれたも不思議なれば、それで私の腹のふくれたも不思議である。向ふの広大の思召しも不思議なれ

ば、それ頂いた此方の心持も不思議である。

今まで当てにならぬ／＼と思うて居た境遇は方角が一転し、今まで隔て隔てぬ、憎む憎まぬと言うて居つた外界迄が一変して仕舞ふ。何が何か分らぬも、

『念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑに、無碍の一道なり。』

と頂くがこれ不思議である。これが佛智不思議の頂けた味なのであります。

大正二年発行『求道』第十卷第五号より。

近角常観先生の念佛の豪氣

柳 瀬 留 治

常観先生の宗教家として劃期的に偉大な方であつたことは、御自身の身を以て法然聖人親鸞聖人の信仰を体してお喜びになり、一生を打ち込んでしぶとい我々を導いて下されたこと、之は生涯忘れられぬことであるが、一方この有難い法を後々まで国の上に護持して末代に伝へたいとの、国家の遠大な念願に基く事蹟の大であつたこと、今更驚くの外はありません。

思ふに常観先生は聖徳太子を非常に讃仰され、千年の末までも国の上にこの法の宣流されんことを願はれた点は、聖徳太子の如く公的な偉大さが思はれる。又常音先生は常観先生をよく内助し、一方生に悩む一人々々の伴侶となりて心を砕いて下された点親鸞聖人の如く慈母の姿が思はれるのです。

常観先生の遠大な公的一面と常音先生の私人としての御

慈航七換素氣

素心嗟撃破敵

長騎中東大勝掌

中宣位血披成唱

佛号

常観

一生が、一は聖徳太子の如く一は親鸞聖人の御一生によく似てゐる様に思はれるのです。

私の今、偉大なる常観先生を言はうとすることは、群盲の象を論ずるにも似てその片鱗にも触れ得られないであらう。否先生を贖すものであらうがお許し頂きます。

先生は学舎に籠り人々に信仰を伝へることを専らとし（盛んな頃は地方伝導にも出られたが）生涯を求道者の為に一身を没する覚悟で居られた。然し偶々宗教上放つて置けぬ大事の起つた時、獅子の如く立ち上つて矢面に立たれるのであつた。

私の知つてからでもローマ法王庁との使節交換とか、宗教法案、宗教団体法案だの、本願寺問題、その他幾つかそうしたことに立たれた。それは内なる燃える信仰に基き止むに止まれず奮起されたものであつた。殊に以前の三教合同とか、宗教法案に対しての信仰態度は深い体験よりのものである。

先生曾てドイツに留学されて西欧の長い歴史上から骨に銘じて見て来られた所に基くものであつた。即ち宗教と政治との関係による長い争ひである。ローマ法王と国の政治と結び付いての宗教の墮落、民族の流血などの深い禍根を究め、政治が宗教に干与すると宗教が生命を失つて墮落してしまふことを痛感されてのことである。そして先生は、

舍」を創められたのです。

世に信を説く方々は信に没して世事を顧みない。先生も寢食を忘れて尊ら信の一念を説いて居られるかに見えた。それが偶々国家社会の上に宗教の存否に拘はる一大事が起つた。迎も黙視するに忍びず起られた。ローマ法王使節交換の問題もさり乍ら、宗教法案上程されるに至つては、自ら矢表に立つて獅子吼せざるを得ざらしめたのです。

要は各宗教はそれ／＼自らの信を基として弘法すべきであり、国家がこれを保護することによつて宗教は墮落し、その生命は無力となり形骸化するものである。況して法律によつて一律の監督をすることは宗教の自由を束縛し、その発展を阻害するものである。曾ての史上に於いて明かに証する所だ、との意見なのである。

第一回の山県内閣の時もさうであつた由であるが、昭和の初頭に法案上程の際、先生は、政治的に党にくみするを信に悖るものとし、その与党たると野党たるを省ず、心の通じ信の通ずることを眼目とし、当局の主腦たる人々に信仰問題として焔を吐く念仏の本音を説かれた。全く方法的政策を用ひず飽くまで信仰一本で貫かれたのです。当時与党たる政友会の横田千之助・森格氏などその一人であつた。又野党たる立場の貴族院方面でも花井卓蔵・木場貞朝氏など、その信仰に胸を打たれ、感激を以て支持された由で

如何にあつても我が佛教にあつては国家でこんなことがあつてはならぬと、肝に銘じて思はれた。それが多日偶々とした事件に遭ひ、信仰上止むに止まれぬ活動となつたものである。

先生は前にドイツ留学中急に本願寺から呼び戻され、何やらんと急ぎ帰朝された。帰つて見ると衆議員選挙に出馬の下準備がしてあり、地盤まで出来てゐたのである。それには先生も驚かれた由である。言下にそれを固辭して野に下り尊ら信仰一つを説く決意をされた。それは、宗教が政治と結びつく醜い墮落を思はれてのこと、殊に宗教は一つの党を結んで他と争ふべきものでない。宗教は如何なる主義主張をもつ人々をも敵にすべきでなく、己れ己れに執する人々に対し、私なき佛のお慈悲に氣付かしめ、等しく救ひに導くもの、救はれて初めて人生に於ける正しさが判るものであることを深く信じて居られたが為である。政治家教育家も一人々々がこの念佛に救はれて、正しい政治、正しい教育をなし得るものである。要は一人々々この念佛に救はれることが根本であるとの信念から先づ信仰の道場を設けられた。然もその名を大經の

「譬へば大海を一人升量せんに却てを經歴して尚底を窮めてその妙宝を得べきが如し。人至心に精進して道を求めて止まざれば当に尅果すべし」との文をモットーに「求道学

ある。之は太子の憲法二条の「人尤た惡しき者鮮し能く教ふれば之に従ふ」の仰せを旨としての態度と思はれる。偶々世に先生を政治家の如く見る人がある。之はこの偉大な信仰に基いての国家百年の大きな先見たるを知らぬ妄の致す所である。

いつも慈母の如く涙を以て信を説かれてゐる先生が、一旦大事に処しては獅子の如く虎の如く壇上熱火の強い信念を吐き、我々涙を以て奮起せしめられるのであつた。

法案が審議未了に附された折、本郷の燕楽軒で我々を招き慰勞の宴を催して下された。そして当時の感慨を詩章に表し御揮毫下された。それは別掲の如く「賤嶽七槍意氣豪」の詩です。誠に当時先生の信仰は「意氣豪」であつた。

他力の信は己れの罪惡深重煩惱熾盛を悲しみ、卑下し滅入るものではない。偉大なる大願業力の加護を得て豪たるを得るものです。

先生の信仰力の偉大且遠大な点、太子の仏法信仰上国家の上に念を置かれたそれに欺ふべき大きさを思はせられるのです。

※

※

※

※

真理の一言

花田正夫

十一月十五日、当市の宗円寺の報恩講に参りました。その時、壇家の某夫人から次の様な告白をお聞きし、深い感銘を受け、誠に有難いので、そのまゝを先づ誌します。

私は本年五十一歳になりますが、結婚後長らく子供が出来ず、とうとう終戦の頃に小学生の男の子を貰ひました。ところが世の中は皮肉なもので、ほどなく男児が生まれ、続いて女兒が生まれました。

さてさうなると、貰ひ子の心が段々ひがみ始め、自分はもう要らん子になつた、この家の邪魔者である、厄介者である、と云ふやうに思ひこみ、又他人様からさうした囁きを聞くにつけ、益々暗い、ひねくれた子になつて行きました。

そこで私は、どうかしてもの明朗な心^{まがら}に帰してやりたいと思つて、時には叱り、時には慰めましたり、又励まし

ても見まして主人と二人で言ふに言へぬ苦勞をいたしましたけれど、サザエの様に堅く塞ちた子供の心は、いつかなこと、てこでも動きませす。家の中はそのために、暗い、わびしいものになりました。

そのことが縁となりまして、私は一生懸命に仏法を聞くやうになりました。そしてお念仏に慰められ、支へられまして、どうにかかうにか一日送りに暮らして居りました。斯うして一年、二年、三年……と月日は流れて高等学校に通ふ様になりましたら、自分でそつと貯金を始めまして、手に入るものは何でもスグお金にかへて預金に夢中になり、家では笑ひを忘れ、孤獨の生活を続ける、よそゝしい態度が目立つてまゐりました。

さうかうして居りますうちに、六歳になつた実子が、不幸にも疫痢^{はやり}にかゝり、早速お医者様にかゝりました処「まあ大丈夫でせう」と申されましたが、昏睡状態を続ける子

供の姿を見守つてゐるうちに、母親の直感といふものでせうか「今度はたすかるまい」といふことが解つてまゐりました。

そこで眠りつづける頻死の子の枕元に、主人と、義理の子と、三人で坐り、手の施しやうもないまゝに、私はお念仏ばかり申して居りました。

すると、子供がパツチリと眼を開けました。その眼の美しさと申しましたら、全く仏様の御眼はこんなであつたらうかと思ひました。微塵のにこりもなく、パツチリと開いたひとみは、まことに美しい限りでございました。

その眼を、私の方に向けて、ジツと、またたきもしないで見据へますので、私は顔を近よせて「お母ちゃんだよ、わかるか」と繰り返すと、かすかにうなづきました。

次に主人の方をじつと見つめますので、「お父さんはここに居るよ、わかるかい」と呼びかけると、またかすかにうなづきました。

やがて、その眼を義兄^{あに}の方に向けて、見つめますので、「義兄ちゃん、呼んでおやり……」と私が言ふと、顔を近づけて「わかるかい」と言ひますと、かすかにうなづきました。然し、それから、義兄の方を見据へて居りますので、どうしたことかと、三人が息をこらして見守つて居りますと、唇をケイレンさせながら

「兄ちゃん、兄ちゃん、兄ちゃん！」

と三声、はつきりと呼んで、ほどなく息が絶えたのでございます。病む子が、いまわのきはに、お父ちゃんとも、お母ちゃんとも呼ばないで、いぢけて淋しい義兄^{あに}だけを「兄ちゃん、く、く、く」と呼んで死んでくれました。

この時義兄^{あに}は声をあげて泣き伏しながら

「お母さん、お父さん、僕が悪かった。堪忍して下さい。……」

と両手について謝まり。

「僕のやうな悪い者を、兄ちゃん、く、く、と言ってくれました。僕は、貯金してすこし資本が出来たら家を飛び出す積りでした。あゝ、もうこんなものも要りません」

と言つて、貯金通帳を投げ出して、わびてくれました。その日から、義兄^{あに}は、もとの明るい、朗らかな少年に帰りました。

そしてまた、今迄は「死んだらしまひだ。誰が死んでから帰つた者があるか。地獄や極楽は、世間の人をいましめるために説いたものだ」と言つて、仏とも法とも思ひませんでした主人が、それ以来、朝夕に仏前に参り、又仏法を聞く心になつてくれました。

私にとりましては、全く仏様が子供となつて、私共を救ひに現れて下さつたと思へません。本当に仏様の有難

さをまぎ／＼見せて頂きました。云云

以上の物語りをお聞きして、私の心に浮びますのが、親

鸞聖人が『行巻』に引用せられてゐる、宗曉禪師の

「還丹の一粒は、鉄を爰じて金と成す。

真理の一言は、悪業を爰じて善業と成す」

と言ふ聖語であります。

更に纏と思ひ浮びますのが涅槃經に説かれてゐる、阿闍世王の廻心の場面であります。ことに阿闍世の耳に、仏語が始めてとどいた時の感激の場面であります。

誰もよく知る様に、阿闍世が父王を殺し、その後大懺悔におち、夜も眠れず、食事もすくまず、悔熱が熾んで、全身膿血が流れ苦悶の底に沈んだ時であります。ギバ大臣は情を尽くし、理をきはめ、王を救ひ得る方は、仏世尊のみであるとの勧め、それに呼応して亡き父の声が空中にひびき、悲母韋提希は沈黙の中に、膿血を洗ひ、熱を冷やし、そこへ仏の月愛三昧の光益があらはれるのであります。

斯様に、大逆の阿闍世一人のために光被してやまぬ慈悲の根本に「阿闍世のために涅槃に入らず」との如来世尊の大慈大悲がましますのであります。かくて己が罪業の故に、仏をへだて、ためらひ、畏れてゐた阿闍世も、やうやく仏心

にひきつけられて仏所に詣でたのであります。その有様を經典に次の様に説いてあります。

爾の時大王、サラソウ樹の間を往き、仏所に至り、仰いで如来の尊容、微妙にして真金の山の如きをみる。世尊は八種の妙なる音を出して「大王」とのたまふ。

時に阿闍世、左右を顧視して「この大衆の中に誰か是我大王なる。我すでに罪逆にして又福德無ければ、如来称して大王となしたまふべからず」と。

その時如来、即ちまた喚びて「阿闍世大王」とのたまふ。時に王、聞き終りて大いに歡喜し

「如来今日、愛言をもつてす。真に如来、諸々の衆生において、大悲憐憫等しうして差別なきを知る」

即ち仏に白して曰く

「世尊、我今、疑心永く遺余なし。定んで如来は真に是れ衆生の無上大師なることを知る」

「世尊、たとひ我天界に生れ天樂をうくとも、猶欣悦せず。如来の一言、顧みて命じたまふに遇ふことを得て、深く欣慶す」

かくて仏を供養し、仏足を礼し、右に三市して、合掌して坐す。

大略この様に述べてあります。身から出た錆として、地獄の華報をすで見、大煩悶におちた阿闍世が、仏心にひかれて、半信半疑の姿で仏前に詣でると、仏は、

「大王よ」更に「阿闍世大王よ」

と呼びかけられたのであります。へだて、うたがひ、おそれる罪業の身を、愛言をもつて呼びかけられたのであります。このよろこびは、地上はもとより、天界のよろこびも遠く及ばぬ、心肝に深く徹するものであります。そこに一

切衆生の無上の大導師、真に自分を救済して下さるお方を発見したのであります。

嗚呼、大悲憐憫、等しうして、更にへだてなき仏心。そこから呼びかけて下さる、真理の一言、如来の一言、それのみが、強剛難化の衆生の心を開いて下さるのであります。道元禪師もまた「愛語よく回天の力あり」と仏陀の徳を讃へて居られます。

正 信 偈 私 解 (八)

白 井 成 允

序記。親鸞聖人の生涯。

建仁元年御歳廿九歳にして法然上人の門に入りたまうた祖聖は、建永二年卅五歳の時、師上人の土佐国に配流せられたまうたのに坐して、越後国に配流せられたまうた。其の六年ばかりの間、祖聖は師上人のもとにありてひたすら

専修念佛の道を学びたまうた。其の間の祖聖伝に於いて次の事どもを窺ふ。

第一に此の間の学道の跡について最も直接に語られるものは祖聖の主著「教行信証」の「化身土巻」の後序の文である。言はく、「愚禿釈鷲、建仁辛酉曆、雜行を棄てて本願

に帰す。」是れは御齡廿九歳にして始めて法然上人に遭ひ
まいらせ、苟くも自力の難はる一切の修行を棄て去りて、
唯本願他力の念佛に帰したまひたる御告白である。——「
元久乙丑歳、恩恕を蒙りて選択を書しき。」是れ御齡卅三
歳のとき師上人の御許しを得て上人の生命をこめたまへる
著「選択本願念佛集」を書き写したまうた御想起である。——
「同じき年の初夏中旬第四日に選択本願念佛集の内題の字
並びに南無阿弥陀佛・往生之業・念佛為本と釈禪空の字と
空の真筆を以て之を書かしたまひき。同じき日、空の真
影申し預かりて図し画き奉る。」是れ師上人の極み無き恩
愛を顧みたまふのである。——「同二年閏七月下旬第九日、
真影の銘に、真筆を以て、南無阿弥陀佛と、若我成佛・十
方衆生・称我名号・下至十声・若不生者・不取正覚。彼佛
今現在成佛・当知本誓願不虛・衆生称念・必得往生。の
真文とを書せしめたまふ。又、夢の告に依りて、禪空の字を
改めて、同じき日、名の字を書かしたまひ畢りぬ。」——
御歳卅四歳、師上人の恩遇愈々濃かなること窺ひまつるべ
きである。因に註す、禪空とは祖聖入信の日、師法然上人
から師名源空の一字を賜うて名づけられたまうたのであら
う。今此に之を改めて書かしめられた名の字とは善信とよ
ばれるのであらう。而して是れ祖聖が何れの日にか夢の中
に聖德太子から或は観音菩薩から呼びかけられたまうた御

「たとひ法然上人にすかされまいらせて地獄におちたりと
もさらに後悔すべからずさふらふ」といふ御語がおもひあ
はせられる。同時に教行信証の初稿が元仁元年法然上人十
三廻忌の記念に録されたと窺ふことも自然である。

此の恩師に対する深き信順の御相は歎異抄及び御伝鈔に
伝へられてゐる所謂信心一異或は信行両座の物語に於いて
も亦窺はれる。今は前者だけを顧みる。

歎異抄の著者は、當時行はれてゐた異なる信心の条々
を悲しき掲げ厳しく批判して正しきに帰らしめようとした
後、之を結びて、先師親鸞聖人の御物語を想ひ起し、詳かに
記してゐる。(因に記す、歎異抄の古写本には此の一節
の缺けてゐるものがある。是れ或は抄の初稿の原型を示す
ものか。)其の御物語に依れば、法然上人のまだ世においで
なされた時に御弟子の方々が数多くあられたのであるが、
其の中で同じ御信心のひとついへば少ししかをられなかつた
ので、先師は御同朋たちの中で言ひあらそひをなされた
ことがあられた。それは先師が善信の信心も師聖人の御
信心も同一だと仰せられたところが、勢観房・念佛房など
といふ御同朋たちがひどく其に抗らひ争はれて、どうして
聖人の御信心に善信房の信心が同一だといふような事が
あらうか、と言はれたので、師聖人の御智慧や才覚の広く
あらせられるのに同一だなどと申すのならばまちがつても

名の字である。それで以上の御想起を記し畢りて、其の深
き感激を祖聖は次の如く述べてをられる。

「本師聖人、今年は七旬三の御歳なり。選択本願念佛集
は禅定博陸(月輪殿兼実・法名円照)の教命に依りて撰集
せしむる所なり。真宗の簡要・念佛の奥義、撰めて斯に在
り、見る者論り易し。誠に是れ希有最勝の華文・无上甚深
の宝典なり。年を渉り日を渉りて其の教誨を蒙る人千万な
りと雖も、親と言ひ疎と言ひ、此の見写を獲るの徒甚だ以
て難し。爾るに既に製作を書写し真影を图画せり。是れ專
念正業の徳なり、是れ決定往生の徴なり。仍りて悲喜の涙
を抑へて由来の縁を註す。」

此の一連の文は教行信証の終に記され、而して此に続い
て激端の如く

「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海
に流す、深く如来の矜哀を知り、良に師教の恩厚を仰ぐ。
慶喜弥至り、至孝弥重し。茲に因りて真宗の詮を鈔し浄土
の要を據ふ。唯佛恩の深きことを念じて人倫の嘲を恥ぢ
ず……。」

の御告白が為されてゐる。祖聖が恩師上人に信順したまふ
ことの深さ、歎異抄に記されたる「親鸞におきてはたゞ念
佛して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとのおほせ
をかふりて信ずるほかに別の子細なきなり」といふ御語、

るようが、往生の信心においては全く同一で些も異なる事が
無いと御返答なされたのであつたが、それでもまだ、どう
してそんな事があらうかと疑惑や非難があつたので、どう
とう師聖人の御前にまいりて執れが是か非かと定めていた
ゞくより他は致し方がなくなつたので、此の言ひ争ひの始
終を申しあげたところが、法然聖人の仰せには、源空の信
心も如来から賜はつた信心であるし、善信房の信心も如来
から賜はられた信心である、だからもとから同一である、
もし別の信心であられるとは源空の参る浄土にはとても
お参りにはならぬまいと仰せられた、といふ事である。

此の先師親鸞聖人の昔の御物語を想ひ起して、抄の著者
は、今日も依然として異なる信心の行はれてゐる事を歎い
てをられるのであるが、此の御物語は、恐らく、親鸞聖人
が山をくだりてひたすらに法然上人の御教を聴きあかし、
遂に此の「そくばくの業をもちける身にありけるをたす
けんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」とたゞ
念佛する一道に入られた。其のおんよろこびを御同朋たち
の中で告白せずにはをられなかつた一時に、はからずも生
じた事であつたらうかと想はれる。之によつて浄土往生の
信は唯是れ如来より賜はる所であつて、些の自力をも含ま
ない、といふ真理が明らかに知らしめられたのである。

師上人から選撰集を書写することを許され、上人の真影をも図画し、刺へ写し得た選撰集の内題の字並びに其の真髓を顕せる要文を師上人から親しく書き与へられた、といふ上掲の文には、祖聖の限りなき御悦びが窺はれる。まことに久しく苦しみ求め来りし人生の根本問題を全く解決し得しめられた法悦と、その法悦を与にする師上人の温情と、同一に念佛して別道無き師弟一如の御交はりは、千歳の後猶人をして随喜せしめずには措かない。

此の師のもとに祖聖が如何に学道にいそしみたまひしかは私共の推測を絶するものがあらうが、其の一端を窺はしむる資料として今に存するものに、当時の祖聖の書写したまへる「観無量寿経及び阿弥陀経の集註がある。謹嚴雄勁なる文字を以て経文を書写し、加ふるに委細を極めて善導大師等の疎文を註記したまへる此の書冊は、当時の祖聖が若々しき精根を尽くして学道に精進したまひし跡を偲ばしめる。思ふに此の如き経論釈の書写は更に多く行はれたのであらうし、殊に其等の要文の抄録は不斷に為されたのであらう。而して更に推測を逞しくするならば、此等親しく書写抄録したまへる手記の文書は、後に越後に於いて日夕繰返し繙かるゝ所となり、やがて教行信証撰述の大業の緒となつたものであらう歟。

して、臨終に引導して極楽に生ぜしむ」と。救世菩薩、此の文を誦して言はく、『此の文は吾が誓願なり、一切群生に説き聞かす可し、』と告命したまへり。斯の告命に因りて数千万の有情に之を聞かしむ、と覺えて夢悟めりぬ。』此は真佛上人の手記の全文である。而して此は祖聖が結婚生活に入りたまつた事に係はりて窺ふべき文である。

然るに御伝抄は、此の文の後半を更に詳しく述べ伝へて云ふ——「救世菩薩、善信に言はく、此は是れ我が誓願なり、善信此の誓願の旨趣を宣説して一切群生に聞かしむべしと云々。そのとき善信、夢の中にありながら御堂の正面にして東方をみれば峨々たる岳山あり、その高山に数千万億の有情群集せりとみゆ、そのとき告命のごとく此の文の心をかかぬ山にあつまれる有情に対して説ききしめおはるとおぼえて、夢悟め畢りぬ云々。」

真佛上人の伝ふる夢記と覺如上人の其とを比べると、其の前半救世菩薩の告命は全く同文であるが、後半之を有帽に聞かしむる辺に於いて後者には東国辺鄙の境を偲ばしめる光景があらはれてきてゐる点が著しい。而して此を見るが如くに描く御伝抄は、此の夢記を結びて——「傳ら此の記録を披いて彼の夢想を案ずるに、偏に真宗繁昌の奇瑞、念佛弘興の表事なり」と言ひ、而して続いて更に祖聖の「後の時の仰せ」に上宮太子の厚恩を謝したまへるを伝へ

此の頃の記録に親鸞夢記と称せられるものがある。其は御伝抄の中に収められて庸く世に知られてきた。但屢々覺如上人の創作であらうと云はれて其の史実たる事が疑はれてきた。然るに近年高田派の宝庫から此の夢記の真佛上人の書写本が見出されたために、其が祖聖御在世の間に既に御弟子たちの間に伝へ知られてゐたものであり随つて実に親鸞の夢の記録であることが疑はれなくなつた。蓋し真佛上人は、元仁元年祖聖の教化を蒙りてより、高田専修寺を創めて大いに弘法の為に勞し、正嘉二年、即ち祖聖の入滅にさきだつこと五年五十歳にして逝ける高弟である。此の如き高弟の手記が伝はつてゐる限り、祖聖が曾て此の如き夢をみられたことは事実であつたに違ひない。御伝抄が之を「建仁三年癸亥四月五日夜寅時、聖人夢想の告ましましき。彼記云、」と時を明らかに記してゐるのは、やはり確かな記録に依つたのであらう。さうすると、これは祖聖の御寿三十一歳の春の夜の夢である。御伝抄が彼記云として録してゐる文と真佛上人の録し伝へた文とは殆んど同じい。今、後者を延べ書きにして此に掲げる。云く、

「親鸞の夢の記に云ふ、六角堂の救世大菩薩、顔容端政の僧形を示現して白納の御袈裟を服著せしめて広大の白蓮に端座して善信に告命して曰く、『行者宿報にて設ひ女犯すとも、我れ玉女と成りて身犯せられん、一生の間能く莊嚴

てゐる。

(此の項続く。十一月廿三日開光庵にて)

狂乱多所為

能瀬茂人

「世尊大慈悲は、衆の為に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著はされて、狂乱して所為多きが如し。』」

について常観先生のいただきやうは

(い)「われわれの日常生活の有りさまが氣違ひのやうだ」と取つてもよく、また、

(ろ)「積尊がわれわれ苦惱の衆生を、いかにもして、助けようとの願から苦業を修めたまはつた、その真剣な修業のありさまが、全く、氣違ひのやうであつた」と取つてもよい。……と申されてゐたかに記憶いたします。

(い)では狂乱々を衆生に見たて、(ろ)では、これを世尊に帰してをるやうに思はれますが、(ろ)のまことに氣づいてみればこそ(い)の自覺も、自然に催されるのであらうかと存するのであります。

貴誌第九号、福島さんの鳩翁道話の、親父実母のお話も「仏様がそこまでみて下さる」やうに頂けてまことに頭のさがることあります。

三十三年十一月廿三日。

編集後記

年の瀬となりました。

十二月八日は佛陀成道の聖日であります。禪家では臘八の接心が生命がけに続けられる日であります。私共も亦念佛裡に、人類にひらかれた暁の光を謝し、新たに佛恩を仰ぐ次第であります。

十二月二日は近角先生の御忌日で先生の「智愚の毒を滅す」の御講話を求道誌から頂きました。佛陀の大悲は「兎の毛、羊の毛のさきにゐる塵」の中にも満ち充ちて下さるとあります。近角先生の御講話は、水も漏らさぬ周到さのなかに、微に入り細にわたる懇切さ、私共の心の隅々を徹見せられての「どう言つたら佛心にめざめてくれようか、どうかして／＼」の御親切、申しやうもありません。かうした書を拝読いたしますにつけても後に生れた者のよろこびを知らされます。それに付くまでも先生の御著書が世に出て頂ける日を願つてやみません、またその日も近いことと確信いたします。

○ 柳瀬尚治様から近角先生の軸物と、又それにちなんだ原稿を頂きました。「人生問題から信仰に入り、信仰か

ら人生に出る。それが出来ない信仰は不徹底である、さういふものは中途で倒れる」と先生は常に仰言つて下さいましたが、その面目が躍動する原稿を頂き、御忌の月に何よりの記念とさせて頂きました。

○ 慈光誌に長年頂きました福島先生の「大無量寿経講話」を来年五月頃に京都の文昌堂で出版の予定の由、書店から通知がありました。いづれ確定し次第お知らせいたします。

○ 去月三日の文化の日、洛西、浄住寺の方丈で催された一道会は、満堂一つにとけた和ぎの中に敬肅さがあり、限りないよろこびのうちに懺悔の深さがある、念佛の香りの菊花と共に匂うた一日でありました。参会の方々は、四国から松本解雄。木村誠一。北陸から加茂光淳。吉野から北岡行男。名古屋から花田正夫。阪神から城一雄、井上善右エ門、加藤正雄、新井千一、梶井一統、京洛から、西元宗助、信国夫妻、佐々木徹真、福本慶子、村上幽香子、村上草路。そこへ白井先生御夫妻を初め、榎原一統、総数四十名近くでありました。

○ そして一人々々が池山先生の想出やら、最近の感想を順々に談合し、満堂

慈光のかがやく趣がありました。毎年一度の集ひであります。文化の日には種々の会が多く障りの多い人々が居られるので、来年からは十月最後の日曜日に催すことにきまりました。

△ 図 書 紹 介 △

阿弥陀さまと夢に語る 自在丸新十郎著。定価二百円発行所。京都市下京区花屋町西洞院、永田文昌堂。振替、京都九三六番。

聖徳太子の生涯と思想 金冶勇著。定価二百五十円。発行所。京都市下京区堀川通花屋町。百華苑。振替、京都二五七八八番。

△ 御 案 内 △
毎月第一、第二、第三、日曜、午后一時半。日曜講話。
毎月廿四日午前午後、教西寺法話会

定価	一部	二十円(送共)
半	年	百二十円(送共)
一	年	二百四十円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
名古屋市南区駄上町二ノ二八		
印刷人	本田 政雄	
名古屋市千種区千種町馬走二八		
発行所	慈光社	
振替口座名古屋一〇四七〇番		